**日本における恥の文化と罪の文化　骨子**

2018年11月23日 小林

この骨子は現時点までの恥の文化と罪の文化についての研究成果（読書ノート）を中間的にまとめたものです。今後も研究を続け、そのうえで論文の形にする予定です。

論文は、恥の文化と罪の文化についての諸見解を単に整理してまとめるだけのものを想定しています。

今後の研究予定の文献は以下のとおり。

* ルース・ベネディクト「菊と刀」（長谷川松治以外の新しい翻訳）を精読する予定。
* 森貞彦『みなしご「菊と刀」の嘆き 学界の巨頭たちが犯した大過』 東京図書出版会 2003年
* 森貞彦『『菊と刀』再発見』 東京図書出版会 2002年
* 1948年出版直後の書評－柳田國男、和辻哲郎、津田宗吉、川島武宜など
* その他、最近の文献を数冊

目次

1 はじめに

2 日本における恥の文化－その由来

　2.1 武士道における恥の意識

　2.2仏教－自己に恥じる

　2.3 その他

3 日本人の恥と羞恥心

4 日本における罪の文化－仏教の影響

　4.1柳田國男の指摘

　4.2鈴木大拙の見解

　4.3五来重「日本仏教と庶民信仰」より

5 日本人の罪悪感

　5.1 犯罪心理学者の見解－共生的な罪悪感

　5.2 精神科医の見解－「見るなの禁止」

6 恥と罪－内面化と外部性

　6.1 日本人のしつけと罪の内面化

　6.2 罪の外部性と恥の内面化

7 まとめ

1. **はじめに**

* ルース・ベネディクト「菊と刀」（原著1946年）は、多面的に日本の文化を論じているが、欧米における罪の文化との対比で、日本は恥の文化であり、人の目があるところでは恥を恐れて悪事への抑制がはたらくとの見解はつとに有名である。（ルース・ベネディクトの見解はもう少し詳しく紹介する。）
* このルース・ベネディクトの見解に触発されて、日本人の学者等から恥の文化と罪の文化について新たな観点から多くの議論が提示されている。
* 恥の文化も罪の文化も、不正行為にたいする抑制力になることから、いかにしてコンプライアンス確保を図るかについて重要な示唆を与えてくれるものと思われる。本稿はこれを念頭におきつつも、恥の文化と罪の文化に関する主要な見解を整理しまとめるものである。

1. **日本における恥の文化－その由来**

日本人の恥の文化はどこから来たものなのか、これについてルース・ベネディクトは明らかにしていない。まずは、恥の文化の由来について日本人学者の見解を紹介しておこう。

* 1. **武士道における恥の意識**
* 柳田國男は以下のように指摘する （副田義也「日本文化試論」より）。恥の文化は武士の文化。武士にとって戦場で弱点・弱さを笑われるのが恥。これにたいして、農民はみんな顔見知りの中で生活しており、笑われる危険は少なく、恥は問題になりにくい。武士の文化が農民・町人に影響を与えた。
* 佐々木さんの論文その他を参考にもう少し書く。
  1. **仏教－自己に恥じる　(平川彰「生活の中の仏教」より)**
* 「慚愧の念に堪えない」の慚愧は仏教用語、慚は自己に恥じることであり、愧はそれを告白して天に恥じること。仏教における道徳の根底には自己に恥じる意識がある。
* 自己に恥じることは、本当の意味での恥じること。自己に恥じるためには、自性清浄心を持つこと。自性清浄心が人に善をなさしめる。自性清浄心とは、心のいちばん深いところにある鏡のようなもの。自我を映し出す鏡であり、この鏡があるから自己のおこなったことが自分に見える。これにより善と悪をわけて考えることができる。この鏡＝自性清浄心に照らして恥じない事をする・恥じる事をしないということが仏教における道徳である。つまり、恥の内面化であり、人目がないところでも自己を律する心である。
* 我思うに、自性清浄心を日常的な言葉に置きかえれば、善い事・悪い事のしつけがきちんとできていれば自分を律する心が自然と育つ、ということなのではないか。
  1. **その他**

（神道、精神分析、心理学などから恥の文化の由来を研究する予定。）

1. **日本人の恥と羞恥心**

**作田啓一「恥の文化再考」(1967年9月、筑摩書房)に収録の論文P.9-26**

* 著者は、R.ベネディクトの「日本は恥の文化」との見解にたいし単純すぎる見かたと批判を加えている。
* **まず、ベネディクトの恥の定義は**、公開の場で＝人の目があるところであざけりや拒否を受けたことで起きる感情。作田はこの恥の感情を「公恥」と名づけています。
* **これにたいして、作田は**あざけりや拒否がなくても、単なる他人からの注視だけで人は羞恥を感じることがあるという（私恥）。たとえば、医者と患者の関係で、医者が患者を患者としてではなく個人として注視した場合、患者は羞恥を感じるのではないか。つまり、普遍的存在として見られるべきときに個体として見られると羞恥を感じる。
* その逆も同様。たとえば、恋人(個体)として見つめ合っている最中に客観的な対象として相手に観察されると羞恥を感じるのであろう。
* このように普遍化と固体化のズレがあるときに、注視されると羞恥が生じる。ベネディクトはこの私恥を考慮していない。
* **つぎに、作田は**ベネディクトの恥の定義は、恥の内面化を考慮していないという。たとえば、軽蔑に値する行為であることがしつけや教育によって子どもの心に植え付けられた場合(公共の場でゴミをすててはいけない等々)、注視がなくてもその行為をひとり恥じるようになる。
* **さらに作田はいう。**人の目があるところであざけりや拒否を受けたことで起きる恥の感情＝公恥は、日本人のみがことさら強く感じるわけではなく、欧米人も同様に感じるのではないか。公恥は欧米人にとっても強い規制力をもっているはず。
* **そうすると日本人に特徴的なのは、**私恥を強く感じることではないかと作田はいう。なぜならば、柳田國男いわく、日本人ははにかむ傾向が強く、はにかみへの強い関心から「にらめっこ」という遊びができた。つまり、日本人はそもそも他人の注視にたいして警戒的であり、そのうえで普遍化と固体化のズレが生じていれば他人の注視にたいしてより強い羞恥を感じる。
* よって、日本は恥の文化ではなく、羞恥の文化である。

1. **日本における罪の文化－仏教の影響**
   1. **柳田國男の指摘 －副田義也「日本文化試論」より**（原典を読むこと）

* 日本にも罪の文化がある。日本人は昔から罪を意識している。日常使われる言葉に「罪」がよく使われている。罪つくりな、罪なことをする、罪のない顔、など。
* 日本人は仏教の影響として罪の報いを恐れることを教えた。これは輪廻転生の教理から来ているが、輪廻転生の考え方は日本固有の信仰のなかにもあった。霊魂の生まれかわりは古来から信じられていたので、輪廻転生は日本に定着した。
  1. **鈴木大拙の見解－副田義也「日本文化試論」より**（原典を読むこと）
* 鈴木大拙「日本的霊性」（1944年）にもとづいて日本における罪の文化を以下のように説明する。なお、鈴木は浄土宗系の大学教授。
* 法然（1133-1212年）が相談を受けた。(1)わたしの仕事は漁師、命をうばう仕事、どうしたら地獄に落ちるのをまぬがれるのか？　(2)わたしは前世の罪がたたって遊女という境遇に落ちたのであろう、どのような罪があったのか？　(2)平重衡は自分が犯した南都焼き討ち（1181年）の罪から苦果はまぬがれない、どうしたらよいのか？
* 上記の罪の意識は自分の人生の否定・批判から出ている。これこそ日本人の罪意識の本質。
* 法然の答えは、阿弥陀如来の救済はあなたのような罪人のためにある。南無阿弥陀仏と唱えなさい。これすなわち、他力本願。
* 鈴木大拙「妙好人」（1948年）（原典を読むこと）
* 浄土真宗は、人間は罪深い存在だという意識が前提としてある。罪深いから、阿弥陀如来にすべてをまかせる他力本願につながる。罪深いからこそ救われる。すなわち、悪人正機。
* 仏教の罪は阿弥陀如来がゆるして救う罪、これにたいしてキリスト教の罪は神が罰して償わせる罪。阿弥陀如来は慈悲深い救いのホトケサマ、キリスト教の神は人間を罰する怖い神さま。
  1. **五来重「日本仏教と庶民信仰」より**

ポルトガル宣教師の目撃談

* 日本人の罪の意識をものがたる出来事として、天正年間（1573-93年）のころ、母親殺しの罪の自覚の上にたって罪ほろぼしのため宗教的実践－小舟で沖に出て入水自殺－をおこなった日本人の記録がポルトガル宣教師が書いた「耶蘇会士の日本通信」（本部への報告書）に残っている。
* この宣教師は、異教徒のこの日本人のおこないはキリスト教徒よりもすばらしいと称賛している。

日本における滅罪死

* 大宝律令（701年）の僧尼令は「焚身捨身」、つまり焼身自殺・投身自殺を禁じているが、これは当時、僧侶の滅罪のための自殺が多かったことを示すもの。
* 出羽三山の湯殿山の即身仏は、弘法大師(835年没)にならって衆生済度の誓願をのこしミイラになったもの。
* 江戸時代、鉄門海上人は青年時代に武士を殺した罪の滅罪のため即身仏になったが、生前には眼病平癒を祈願して衆生の眼病の苦を身代わりとなって受けるため自己の左眼をくりぬいた。
* 明治17年、林実利(じつかが)は座禅のまま那智の滝に投身。日本の宗教史上、最後の捨身の例。
* 日本古来の修験道は滅罪のための捨身を最高の名誉とした。
* 以上のような事例は、日本にも罪の文化があることを示しており、日本人の宗教心に影響を与えた。

巡礼と遍路

* 西国・坂東・秩父観音巡礼など多くの遍路の道がのこっているが、これは日本人の罪に意識の強さをものがたるもの。
* 五来いわく、宗教とは放浪である。古来日本の神は巫女や聖に憑依して所々を巡った(遊幸)。四国八十八か所巡りは空海の遊幸の跡をたどる信仰からはじまり、因果応報にもとづく罪業を滅罪する一つの方法として庶民に浸透していった。

1. **日本人の罪悪感**
   1. **犯罪心理学者の見解－共生的な罪悪感　（新田健一「組織とエリートたちの犯罪」より）**

* 罪悪感とは、法的・道徳的にマイナスと認知することによって自己が自我に対して抱く否定的感情。
* そこには「見る自己」と「見られる自己」の存在が必要、「見られる自己」は生理的・社会的発達過程をへて成立し、「見る自己」は社会文化的に形成される。つまり、自我の二重構造。これを「共生的自我構造」という。
* 和辻哲郎も自我の二重構造を認め、「外に出ている」自我（見られる自我）は社会文化的環境要因つまり風土に規定される、という。そして二重の自我をもつところの人間は「人」であると同時に「人びとの結合・共同体としての社会」であり、「家」「狭い地域」の人間関係が文化的特殊形態としての日本人の精神構造の特徴を規定している、とのこと。
* 土居健郎のいう「甘えの構造」も筆者のいう「共生的自我構造」も日本の社会文化的環境から形成されてきたが、人間関係を身内と外（ウチとソト）に分けて身内の中では気をゆるし合い・もたれ合い・かばい合って身内どうしの結合を強化し、外に対しては対立し・無関心でいる生活環境の中では「見る自己」＝主体的自我は身内の中に埋没してしまう。日本では主体的自我は育ちにくい。このような自我構造をもつ日本人は、自己の違法行為の結果が身内（家族・会社・学校・ご近所）の評価・感情にどのように影響するかが最大の関心事になる。
* 仏教の影響として、自我が育たちにくい日本社会では、無我の境地が理想とされる精神風土を生んだ。
* 和辻哲郎によれば、この精神風土の中で、日本人の倫理は「関係性の倫理」である、なぜなら自我は個として存在しておらず（無我）、自我は他者との関係の中にのみある。ここに「関係性の倫理」が発生し、これは、家族関係→地域社会→国家との関係、で発展していくものである。（筆者注:これは、天皇を頂点とする全体主義的倫理観であるとして戦後和辻倫理学は批判された。）
* 日本人は「和」を乱すことに罪悪感を感じる。和とは他者との関係であり、これを乱すことに罪悪感を感じる。
* 日本は「西欧的な法秩序」と「和の秩序」の二重規範性を有しており、これは犯人による犯行の正当化理由に影響している。「悪い事とは知りながらたのまれたからには断れなかった」「恩があって裏切れなかった」などが犯行の正当化理由として言われる。周囲の反応も「事情を知れば同情できる」「私にとても親切だったあの人がそんな悪い事をするはずがない」など、義理と人情の連帯感が合理的判断に優先する。
* これは内部告発に対する周囲の反応に顕著にあらわれる。つまり「裏切り行為だ」「和を乱す背信行為だ」と批判される。
* 日本人の罪悪感は共生的罪悪感といえる。共生的とは、共に生きること。たとえば、日本の受刑者がよくいう反省・謝罪の言葉は、「こんなことをして親兄弟に申し訳ない」「母親にかわいそうな思いをさせてしまった」。つまり、親兄弟との共生的な罪悪感＝親兄弟とともに共有する罪悪感。この反省・謝罪の言葉を聞いたヨーロッパの刑務官いわく、「謝罪は被害者にすべきで親には関係ない」。
* 自我が弱い日本人は、自己の心の痛みを身内の情緒的な反応に転化させ、親兄弟に許してもらうことを期待するという「甘え」を示す。
* この甘えは企業・官公庁などの組織にも見られる。不祥事を行なった社員は、「会社に迷惑をかけて申し訳ない」など謝罪は身内に向けられる。つまり、ウチにだけ関心が向きソトには無関心。
  1. **精神科医の見解－北山修の「見るなの禁止」**
* 現在、われわれは法律や社会ルールに反する行動をとったときに罪悪感を感じます（「いけないことをしてしまった」）。それでは、法律や社会ルールやムラの掟も明確に存在していなかった原始時代において、日本人はどのような場合に罪悪感を感じたのでしょうか？　言い換えると、もっともプリミティブな罪悪感とはどのような場合に感じるのでしょうか？
* 精神科医・北山修はこの問題にたいして、日本の神話や昔話を研究することから「見るなの禁止」という概念を提唱し、これによって日本人の深層心理における罪悪感について説明をした。（参考文献は、北山修・山下達久編著「罪の日本語臨床」（創元社、2009年5月）、北山修・橋本雅之「日本人の〈原罪〉」（講談社現代新書、2009年1月））
* 「見るなの禁止」とは、たとえば「イザナキ・イザナミ神話」や「鶴の恩返し」に出てくる女性の「見ないでください」との禁止をいう。その夫はこの禁止にもかかわらずのぞき見したため、女性の正体、すなわち腐乱死体や鶴であることを知ってしまう。正体をあばかれた女性はそれを恥じて夫のもとから去って行ってしまう。
* ここから北山は、ある人の善・悪や醜・美などの二面性をあばいてしまったときの「すまない」という感情が日本人の罪悪感の原始的な感情だと説明した。たとえば、夫のイザナキが愛する妻イザナミの腐乱死体という醜い姿をあばいてしまったときに感じた「すまない」という感情であり、「鶴の恩返し」では自分の羽を抜いて布を織っていた血みどろの鶴という正体をあばいてしまったときに感じた「すまない」という感情である。（フロイトの説く罪悪感も要研究）

1. **恥と罪－内面化と外部性**
   1. **日本人のしつけと罪の内面化　（長野晃子「日本人はなぜいつも「申し訳ない」と思うのか」）**

* 「菊と刀」で日本は恥の文化、欧米は罪の文化といわれ、日本では他人の目がないところでは恥をかかないので悪事にはしる傾向があるとのこと。この画一的なモノの見かたは間違っている。なぜ日本では犯罪率が低いのか（諸要因を考慮しても）、恥の文化・罪の文化では説明できない。（たとえば、1987年、10万人あたり殺人: 日本1.3、仏4.1、西独4.3、英5.5、米8.3）
* 日本人の遵法精神の高さはいたるところで見られる（外国人の指摘）：①小学生の電車通学（特に地下鉄）、②銀行の窓口に防弾ガラスがない、③自販機が壊されていない、などなど。
* 日本人の犯罪に対する抑制心はどこから来るのか、罪を犯してはいけないという内面的強制力があるからだと思う。日本も罪の文化だといえる。ただし、欧米とは罪の意識が異なる。ベネディクトはこれを見落としている。
* 欧米人の罪の意識は、神という外部からの命令に違反することを罪と感じる。これにたいして、日本人の罪の意識は、自分の内部にある「他人に迷惑をかけてはいけない」という気持ちに違反したときに罪を感じる。
* 欧米人の罪の意識はキリスト教から来ており、親の子どもにたいするしつけも神の代理人として親が子どもに罰を与えることで子どもをしつける。たとえば、お尻をたたく。最近までフランスの学校にはムチが普通にあった。先生が神の代理人として罰を加える。
* 日本では、子どもを押し入れ等に入れて「なぜ怒られたのか考えなさい・反省しなさい」と自分の心で「悪かった」と気づくことをうながしてしつける。道徳の教科書でも「してはいけない事」に自分で気づくことを重視している。
* キリスト教には罪を帳消しにする懺悔という方法がある、そのうえ現代はキリスト教への信仰心が薄らいできている。つまり自分の外部にあった神の存在が薄らいできている。これに対して日本のしつけでは依然として悪い事を自分で気づくことを重視しているので自分の心の中に悪い事に対する抑制心が植え付けられている。
  1. **罪の外部性と恥の内面化　（森三樹三郎「名と恥の文化」）**
* 名とは名誉。名と恥は裏表の関係にある。恥の文化は中国が本家。中国では恥は内面的な強制力であり、罪は刑罰に象徴されるように外面的強制力。
* 恥も学習により心に定着すれば内面的強制力になる。罪の意識は刑罰への恐れであり、外部からの強制力である。
* ベネディクトはキリスト教の罪の文化は内面的な強制力であり、人目がないところでも悪事にたいする抑制力があるというが、要は、恥の意識や罪の意識がしつけ・教育により内面化されることが重要。内面化されれば人目がないところでも悪事にたいして抑制の心が働く。

1. **まとめ**

以上